

『竜二漂泊 1983』

この窓からあ、なんにも見えねえなあ』



谷岡雅樹・著

三書房・刊
定価・2600円十税愚直なまでに青春ドラマな映画評論
細野辰興

この谷岡雅樹著の「竜二漂泊1983」の窓からあ、なんにも見えねえなあ』(以下は「竜二漂泊1983」と記す)を「仁義の幕場」(75年東映 監督・深作欣二 主演・渡哲也 脚本・鴨井達比古)の「石川力夫のよう

ら作品群の「残り香」を求めて弄んでいた映画人最後の時代と云っても良いだろう。

谷岡は、「竜二」をその時代の象徴的な作品と捉え、川島通監督と金子正次が具現化した「竜二的なモノ」に拘る、トコトン拘っていく。

谷岡の「竜二的なモノ」に拘る筆致は、「竜二」公開までのバック・ステージをフィクションとして描いた拙作「竜二Forever」(02) 原作・生江有二 主演・高橋克典 脚本・細野辰興、星貫則)と符号している。谷岡が「竜二漂泊1983」で拘っていることを私は、「竜二に成れるか?」と云う主題で模索していた。谷岡は、「竜二Forever」は傑作だ。だけれども、その年のキネマ旬報ベストテンには一票も入っていない」と「竜二漂泊1983」の中でその理由を自己分析するかのようにつれてくれているが、その「竜二Forever」と監督である私にも更に容赦なく言及して来る。(私と私に關係する情報に少なからぬ誤りがあるのは些か困ったことだが)否、「竜二Forever」だけでなくTVドラマ「どんは」(脚本・黒土三男)にも「俺たちの旅」(脚本・鎌田敏夫他)にも、そして谷岡が監督と兼う脚本家、神波史男の死にも容赦なく言及してくる。ところが当時の映画人、芸能人、ミュージシャンでこの本の中に名前が出て来ない者は居ないのではないかと思

な本)である、と評すのは穿ち過ぎだろうか。戦後の無秩序状態から徐々に秩序が回復されていく中で、ヤクザより次第に小利口な小市民のようになり始めた親分や兄弟分に對し、「ある時点」に拘り時流に乗れないまま上下左右関係なく牙を剥き斬りかかって行った愚直なヤクザ、石川力夫、映画「竜二」(監督・川島通 脚本&主演・金子正次)と「その時代」を検証していく谷岡雅樹が、脳内で通り過った人物を「ヤクザか市民か」をキー・コンセプトとして前に衣着せず本音で批評していく筆致に、私は石川力夫が重なって仕方がなかった。

青春ドラマの定義の一つを「何を以って生きて行くべきなのかを判らない若者が主人公」とすると、「竜二」が公開されセンセーションを巻き起こした1983年時点では「何を以って生きて行くべきなのかを判らなかった」二十歳の谷岡青年が、「竜二」と金子正次に遭遇して衝撃を受けたことに拘り続け30年後に上梓し

うほどのオンパレードだ。「竜二的なモノ」「金子正次のなモノ」を手探りしながら正に右も左もなく満身創痍も厭わず谷岡はこのパレードに斬り込んでいくのだ。

一方で、1983年までをキリギリ「プロの時代」、「映画人の時代」とも捉え、それ以降、如何に「素人の時代」になっていったかと現代への違和感を漏らす。色々な分野で戦後確立された体制の瓦解が始まり、映画界ではプログラマ・ピクチャー(プロダクション)と云うシステムが崩壊、その崩壊への意識的なオマージュと予感が映画「竜二」であると位置づけながら。

その違和感は、ヤクザ社会と市民社会の間を「行って来い」した金子正次の「竜二」のように一般市民が生産手段を持たない「芸能の民」へ越境し始め、素人の卒業や悪ふけの延長線上に成り下がってしまった芸能界、つまり、一般人の中の「ヤクザ性」と市民性」がポスターレスに成った現代へと疑問を投げかけていく。本来、「芸能の民」は間に属する者ではなかったのか、とでも云いたいように。

同時に、この「竜二漂泊1983」は、満卷く欲望と挫折と嫉妬と保身のウネリに呑み込まれていった多数の芸能人、映画作家たちへの壮絶なるレクイエムであり墓碑銘であるとも云え

たこの本は、単なる映画評論に留まらず谷岡雅樹の「青春ドラマ」になっていて当然なのだろう。自身のトラウマ(青春の残滓)を確認するかのようになり「ある時点」=1983年周辺(正確には78年から83年)に拘り、映画界と芸能界と自分の右往左往を記している内容からもそれは明らかだ。「仁義の幕場」が優れた青春ドラマでもあったように。

1983年(昭和58年)周辺は、映画界で云えば1976年にプログラム・ピクチャー・キングだった高倉健が東映を去り、1977年に「トラック野郎」シリーズ(監督・鈴木朗文 主演・菅原文太)が終了した時点で大手撮影所発のプログラム・ピクチャーは寅さんとロマン・ポルノを残してほぼ瓦解していた。しかし、撮影所育ちの巨匠、ベテラン監督たちと撮影所周辺で育った若手監督たちが、撮影所システムではない製作システムで拮抗して作品作りを競い始めていた面白い時代でもあった。ディレクターズ・カンパニーに象徴された若手監督集団やNCCP等のプロデューサー集団、ブレイントラスト(後のメリエス)等の脚本家集団も参入し、フリーの助監督だった私も「映画」を獲れるかもしれない?と胸を奮わせていた熱い時代。昭和30年代の撮影所黄金期の作品群を浴びるようになって育ってしまった我々世代が、それ

る。正に闇の群れの趣きだ。

しかし、それよりも私は、この本の中に映画人としての「覚悟と希望」を見つけたかと思つている。谷岡が引用している大島清監督の言葉のように、青春時代に映画を親で熱く語った人達もやがて年齢と共に映画を親なくなる。全く親なくなり、語らなくなる。しかし、私は愚直にも映画を親で、語り続け、そして作り続けて行きたい人間なのだ。大島監督が云うように、それが青春と云えば青春なのだろう。

この「竜二漂泊1983」には、そんな愚直な人間で在り続けたい、と確認させてくれる稀有な力が漲っているのだ。痛切、真切、切実、色々な言葉も浮かぶが、自身の中の市民性を断ち切つて自らの満身創痍を晒け出す「竜二」は未だ居るはずだ。東日本大震災以降のこの日本にも。

それ故に、映画TV演劇のスタッフ、キャストを含み創作の世界へ身を投じた者、投じようと思つた者、その周辺に居る者には最後まで読まなければいけない義務がある本だとも云つておきたい。

読後、二つのフレーズが深く静かに心に沁み込んで来た。

「貴方は、ヤクザですか? 市民ですか?」

そして、

「未だ青春を生きますか?」と。